

教職課程におけるキャリア支援（Ⅱ）

—インターンシップに関する中学生の意識調査—

伊藤 敦 美

1 はじめに

1-1 問題と目的

近年、教職関連科目の補完や学習指導の具体的・実践的な経験学習を目的として、教育実習以外にインターンシップやスクールボランティアとして教職を希望する大学生が学校教育現場を体験する機会が広がっている。

敬和学園大学の英語科教職課程においても、2000年度から新潟県北蒲郡聖籠町立聖籠中学校において英語授業の学習支援ボランティアを開始したことを契機に、近隣の中学校において英語授業の学習支援を行うインターンシップを実施している⁽¹⁾。学外での学習支援活動に加えて、大学内においてもネイティブ・スピーカーが担当する初級レベルの英語授業における学習支援を行う大学内ティーチングアシスタントも実施している⁽²⁾。

私は、敬和学園大学の英語科教職課程において取り組んでいるインターンシップと大学内でのティーチングアシスタントの活動を採り上げて、教職を目指す学生が、これらの活動からどのような影響を受けているのかについて調査し、キャリア・ビジョンの明確化やキャリア支援機能を果たし得るか否かについて検討した。その結果、いずれの活動も教職を目指すというキャリア・ビジョンの明確化や、自らの力量不足の解決や直面している問題解決のための学習意欲の変化といったキャリア・デザインを支援するキャリア支援機能を果たしうるものであることが明らかになった⁽³⁾。

学校教育現場でのインターンシップやスクールボランティアは、教職を目指す大学生のキャリア・ビジョンの明確化やキャリア・デザインを支援する役割に加えて、学校教育現場からも学習指導の補助やクラブ活動・行事などの補助の役割を期待されている。これは、本間が「生徒の個に応じた支援が細かく出来るように、大学生のTAの存在が欠かせない」⁽⁴⁾と述べていることから明らかである。

そこで、本研究では、大学生による学習支援活動を受けた中学生の意識を調査することによって、インターンシップについて、大学生のキャリア・ビジョンの明確化やキャリア・デザインを支援する役割に加えて、学校教育現

場においていかなる役割を果たし得るのかについて検討することを目的とする。

1-2 構成

本論文は、4章から構成される。第1章では研究の問題と目的、構成、第2章では研究方法、対象者、調査期日、調査の概要が示される。第3章では調査結果の説明と、調査結果の考察が行われる。第4章は研究の成果と今後の課題である。

2 研究方法

2-1 対象者

大学生が週に1度インターンシップに行っている新潟県内の中学校2年生42名、3年生20名、計62名。

2-2 調査期日

2006年2月

2-3 調査の概要

調査用紙を中学校の授業時間に配布し、終了後回収する方法で調査を実施した。調査用紙は、表紙とインターンシップの大学生に関する調査から成っている⁽⁵⁾。インターンシップの大学生に関する調査は、「とてもそう思う」から「全くそう思わない」の5件法による選択式の設問(16問)と、選択式の設問を補足するための自由記述の設問(8問)から構成されている。調査用紙は、計23の設問から構成されている。5件法による選択式の設問内容をTable 1に、自由記述の設問内容をTable 2に示す。

3 結果と考察

3-1 集計方法及び分析対象者

選択式の設問について、「とてもそう思う」という最も高い水準に対応する反応を1点、「全くそう思わない」という最も低い水準に対応する反応を5点として計算する方法及びそれぞれの質問に対する調査対象者の反応数を合計する方法で集計した。

なお、調査対象者62名のうち、問17の「大学生に学習支援を受ける機会がありましたか」の設問に「はい」と答えた36名(中学3年生12名、2年生24名)を分析の対象とした⁽⁶⁾。

Table 1 インターンシップに関する調査項目（選択式）

設問 1	一人の先生による授業よりもよかった
設問 2	英語の授業に、より興味が持てた
設問 3	実際に自分の英語学習により効果があった
設問 4	大学生のインターンシップを、これからもぜひ続けてほしい
設問 5	様々な先生（大学生）の英語を「聞く」機会が増えてよかった
設問 6	英語の会話練習をする助けになった
設問 7	英語を「書く」活動の時の助けになった
設問 8	英語を「読む」活動の時の助けになった
設問 9	英語の発音を直してもらった助けになった
設問10	英語の文法を理解する助けになった
設問11	分からないところを先生に質問する機会が増えてよかった
設問12	積極的に授業に参加してくれた
設問13	熱心に生徒の指導をしてくれた
設問14	分からないところを、分かりやすく説明してくれた
設問15	親しみやすかった
設問16	大学生が英語の授業にいてよかったと思いますか

(筆者作成)

Table 2 インターンシップに関する調査項目（自由記述式、一部選択式）

設問17	大学生に学習支援を受ける機会がありましたか。どちらか丸で囲んでください（はい・いいえ）
設問18	17で「はい」と答えた人は次の質問に答えてください。どのような学習支援を受けましたか。大学生に学習支援を受けてどう思いましたか
設問19	17で「いいえ」と答えた人は次の質問に答えてください。どうして大学生に学習支援を受ける機会がなかったのですか。大学生に学習支援を受けなかったことについてどう思いますか
設問20	大学生が英語の授業にいてよかったことはどんなことですか
設問21	大学生が英語の授業にいてよくなかったことはどんなことですか
設問22	大学生にどのようなことをしてほしいですか
設問23	英語の授業でどんなことをしてみたいですか
設問24	大学生が中学校の授業に来ることについて、思っていることを自由に書いてください

(筆者作成)

3 - 2 分析対象者の得点の平均と標準偏差

選択式の設問についての分析対象者全体及び各学年の平均と標準偏差は、全体は $M=30.08$, $SD= 9.82$ 、3年生は $M=43.75$, $SD=10.74$ 、2年生は $M=35.25$, $SD= 8.15$ であった。2年生と3年生を比較すると2年生の方が大学生のインターンシップについて肯定的な反応を示していることが分かる。2年生と3年生の反応には差があるが、3年生の分析対象者が12名と

少ないことから、以下では 2 年生と 3 年生を区別せずに分析することとする。

3-3 大学生の授業参加に関する設問 (問 1, 4, 11, 16)

分析対象者である中学3年生及び2年生は、週に1度、選択英語の授業あるいは通常の授業の際に大学生による学習支援を受けている生徒である。大学生は、主に教科書のリーディングの補助、ワーク学習の補助、テスト対策学習の補助、英語を使ったゲームなどを行っている。本節では、大学生の授業参加に関する設問について検討し、中学生が大学生による学習支援活動をどのようにとらえているのかについて検討する。各設問の結果をTable 3に示す。

大学生が参加している授業について、「一人の先生による授業よりもよかったか」(設問1)を尋ねたところ、67%の生徒が「とてもそう思う」「そう思う」と答えた。「そう思わない」「全くそう思わない」と答えた生徒はいずれも0人であった(Table 3)。「どちらともいえない」と答えた生徒は33%いるものの、この結果は、大学生による学習支援活動を中学生が好意的にとらえていることを示している。

「大学生にどのような学習支援を受けましたか」(設問18)、「大学生が英語の授業にいてよかったことはどんなことですか」(設問20)という自由記述式の設問においては、「質問に何度も答えてくれた」、「質問する機会が増えた」、「先生より年齢が近く質問しやすかった」というように学習環境が向上したという回答が多くみられた。「分からないところを先生に質問する機会が増えてよかった」(設問11)という設問についても、61%の生徒が「とてもそう思う」「そう思う」と答えている(Table 3)。

これらの結果から、大学生が授業に参加することによって、多くの生徒は一人の先生の授業よりも受けやすく、特に質問をする機会が増える、質問しやすくなると考えていることが分かる。「大学生が英語の授業にいてよかつ

Table 3 大学生の授業参加に関する設問

	とてもそう思う	そう思う	どちらともいえない	そう思わない	全くそう思わない
問1	9人(25%)	15人(42%)	12人(33%)	0	0
問4	11人(31%)	15人(42%)	7人(19%)	3人(8%)	0
問11	5人(14%)	17人(47%)	12人(33%)	2人(5%)	0
問16	8人(22%)	22人(61%)	4人(11%)	2人(5%)	0

(筆者作成)

たと思いますか」(設問16)についても、83%という非常に多くの生徒が「とてもそう思う」「そう思う」と答えており (Table 3)、大学生による学習支援活動が生徒たちに受け入れられていることは明らかである。

「大学生のインターンシップをこれからも続けてほしい」(設問4)という間については、73%の生徒が「とてもそう思う」「そう思う」と答えている (Table 3)。この結果からも、大学生による学習支援活動は生徒たちに好意的に捉えられていることが分かる。

大学生による学習支援活動を多くの生徒 (73%) が好意的に捉えている一方で、27% (10人) の生徒は「どちらともいえない」「そう思わない」と回答している (Table 3)。これらの生徒10人は、「大学生が英語の授業にいてよくなかったことはどんなことですか」(設問21)という間について、2人は「うざい」「ゲームとかめんどろ」とそれぞれ回答しているが、8人は「特になし」と回答している。したがって、2人を除く他の8人について、大学生が授業に参加することによって不都合があったわけではないにも関わらず、なぜインターンシップを継続することについて消極的な姿勢であるのかについてさらに検討する必要がある。

3 - 4 大学生が授業中に果たした役割に関する設問 (問 5, 6, 7, 8, 9, 10)

前節において、中学生は大学生が授業に参加することに概ね好意的であることが示された。本節では、大学生が授業場面において果たした役割について検討する。各設問は、大学生は、英語を「聞く」(設問5)、「書く」(設問7)、「読む」(設問8)時の助けになっているか、英語の「会話練習」(設問6)の助けになっているか、「発音」(設問9)を直してもらい、そして「文法」(設問10)を理解する助けになっているかというものである。各設問の結果をTable 4に示す。

「とてもそう思う」「そう思う」と答えた生徒の割合が高かったのは、「文法」(58%)と「書く」(56%)についての設問であった (Table 4)。大学生は、多くの場合、教科書を使用する通常授業でなく、問題集を使って実施される選択英語の授業の学習支援を行っているため、問題集の問題を解く補助をすることが多くなり、生徒たちは、文法事項の説明や書くことについての支援を受けていると感じることが多かったと考えられる。前節で検討した「大学生が英語の授業にいてよかったことはどんなことですか」(設問20)という自由記述式の設問にも、質問に関する回答の他に、「文法を教えてもらった」「分からない単語を教えてもらった」ことが挙げられている。

「発音」、「会話」、「読む」時の助けになっているかを問う設問に、「とてもそう思う」「そう思う」と答えた生徒の割合は、それぞれ27%、36%、44%であった (Table 4)。「発音」と「会話」については、「どちらともいえない」と答えた生徒の割合を下回っている。この結果も、学習形態による影響があると思われるが、「発音」や「会話」といった英語学習において重要な位置を占める項目での学習支援活動をさらに充実できるよう、支援の具体的な方法などを検討する必要がある。

だが、いずれの設問についても、「そう思わない」「全くそう思わない」という回答が少ない点に注目したい (Table 4)。多くの生徒は、大学生が授業中に行う学習支援活動について否定的には捉えていないことが、この結果から明らかである。「大学生に学習支援を受けてどう思いましたか」(設問18)という質問にも、「よかった」「うれしかった」「自分のためになった」「楽しかった」といった記述が数多くみられる。この結果は、前節において大学生が授業に参加することについて、多くの生徒が好意的に捉えていた結果と同様の傾向である。

3-5 学習意欲に関する設問 (問2,3)

本節では、大学生の学習支援によって、中学生の英語の学習意欲に何らかの影響があったか否かについて検討する。各設問の結果をTable 5に示す。

まず、「英語の授業により興味が持てた」(設問2)という問については、「とてもそう思う」「そう思う」は36%、「どちらともいえない」は56%であった (Table 5)。大学生が英語の授業に参加することによって、約4割の生徒の英語の授業に対する興味は強くなった一方で、約6割の生徒は、ほとんど影響を受けていない。1週間に一度、大学生が英語の学習支援活動を行った程度では、教科の教師が1人で担当している授業を含めた英語の授業全般についての興味が強くなるには至らないようである。

Table 4 大学生の授業参加に関する設問

	とてもそう思う	そう思う	どちらともいえない	そう思わない	全くそう思わない
問5	2人(5%)	13人(36%)	15人(42%)	4人(11%)	2人(5%)
問6	3人(8%)	10人(28%)	17人(47%)	5人(14%)	1人(3%)
問7	5人(14%)	15人(42%)	13人(36%)	3人(8%)	0
問8	4人(11%)	12人(33%)	14人(39%)	6人(17%)	0
問9	2人(5%)	8人(22%)	19人(53%)	4人(11%)	3人(8%)
問10	3人(8%)	18人(50%)	11人(31%)	4人(11%)	0

(筆者作成)

次に、「実際に自分の英語学習によい効果があった」（設問3）という間については、「とてもそう思う」「そう思う」は41%、「どちらともいえない」は39%であった（Table 5）。英語の授業についての興味に比べると、英語学習への効果の方が若干大きかったといえる。

いずれの設問の結果からも、圧倒的に多くの生徒の学習意欲向上にはつながってはいないといえるが、約4割の生徒の学習意欲に変化があったことは注目すべきである。「大学生に学習支援を受けてどう思いましたか」（設問18）という設問には、前節で示した回答に加えて、「うれしかった。英語の勉強を頑張ろうと思った」という回答がみられることから、大学生による学習支援活動に一定の効果はあることが分かる。引き続き、さらに多くの生徒の学習意欲向上につながるような学習支援の在り方を検討する必要がある。

「大学生にどのようなことをしてほしいですか」（設問22）、「英語の授業でどんなことをしてみたいですか」（設問23）という間についての回答から、今後の学習支援活動の在り方についての示唆を得ることができる。生徒たちは、大学生に対して「質問に応じて詳しく教えてほしい」「分からないところを分かりやすく教えてほしい」「黒板を使って説明してほしい」「英語を使ったゲームをもっとしてほしい」「もっと英会話をしたい」といった希望を持っている。つまり、生徒たちは、「分からないことを分かるようになりたい」という願望を持っており、大学生にそのための手助けしてほしいと願っている。したがって、大学生が、質問により適切に答えられるようになること、より分かりやすく説明できるようになること、さらに大学での学習を活かした英語を使った活動を工夫することによって、学習支援活動はさらに充実したものとなり、生徒の学習意欲向上により一層貢献できるようになると考えられる。

3-6 大学生の学習支援の態度に関する設問（問12, 13, 14, 15）

本節では、大学生の学習支援の態度について、生徒たちがどのように感じているかについて検討する。各設問の結果をTable 6に示す。

「積極的に参加してくれた」（設問12）か否かを問う設問については、「とてもそう思う」「そう思う」が73%という結果であった（Table 6）。生徒たちの多くは、大学生が積極的に自分たちの授業に参加してくれたと感じているようである。「熱心に生徒の指導をしてくれた」（設問13）を問う設問についても、「とてもそう思う」「そう思う」と答えた生徒は、61%と設問12ほどではないが、高い割合であった（Table 6）。

積極的に授業に参加してくれる、そして、熱心に指導してくれる大学生の

姿を見ているからこそ、3-3で検討したように、大学生による学習支援活動は生徒たちに好意的に捉えられており、約7割の生徒がインターンシップを今後も続けてほしいと考える結果となったのであろう。

「分からないところを、分かりやすく説明してくれた」（設問14）か否かを問う設問については、「とてもそう思う」「そう思う」と答えた生徒は、70%という高い割合であった（Table 6）。3-4、3-5で検討した通り、生徒たちは大学生に対して質問に答えてもらいたいと望んでおり、生徒たちにとって大学生は、先生よりも気軽に質問が出来る存在であることから、多くの生徒が大学生に質問し、質問に答えてもらうという経験を持つことができたと考えられる。

「親しみやすかった」（設問15）か否かを問う設問については、「とてもそう思う」「そう思う」と答えた生徒の割合は、78%であった（Table 6）。「そう思わない」「全くそう思わない」と答えた生徒はいずれも0人であったことから、大学生は生徒たちにとって相当程度親しみやすい存在であったといえる。今後とも、この親しみやすさという利点を活かした学習支援活動を継続することが大切である。しかし、「どちらともいえない」と答えた生徒が22%いることにも注目しなくてはならない。彼らは、大学生と接する機会が少なかつたために判断することができなかつたのか、あるいは大学生と折り合いが悪かつたのかなど、学習支援活動をさらに充実させるために、その原因について検討する必要がある。

以上のように、大学生の学習支援の態度については、生徒たちは非常によい印象を持っている。しかし、「大学生が英語の授業にいてよくなかつたことはどんなことですか」（設問21）を問う設問では、3-3で検討した結果

Table 5 学習意欲に関する設問

	とてもそう思う	そう思う	どちらともいえない	そう思わない	全くそう思わない
問2	3人(8%)	10人(28%)	20人(56%)	2人(5%)	1人(3%)
問3	3人(8%)	10人(28%)	14人(39%)	5人(14%)	2人(5%)

(筆者作成)

Table 6 大学生の参加態度に関する設問

	とてもそう思う	そう思う	どちらともいえない	そう思わない	全くそう思わない
問12	11人(31%)	15人(42%)	8人(22%)	2人(5%)	0
問13	5人(14%)	17人(47%)	13人(36%)	1人(3%)	0
問14	6人(17%)	19人(53%)	9人(25%)	2人(5%)	0
問15	14人(39%)	14人(39%)	8人(22%)	0	0

(筆者作成)

に加えて、「あまり集中できなかった」「年齢が近いことによって雑談することが多かった」「緊張する」「大学生が話をしていた」といった回答も若干みられたことから、インターンシップに参加する大学生の意識を高める指導のより一層の徹底の必要性も示唆された。

最後に、「大学生が中学校の授業に来ることについて、思っていることを自由に書いてください」（設問24）という問について検討する。生徒からは、「人とのコミュニケーションが増えることはいいことだと思う」「新鮮だった。歳が離れていないので、親しみやすかったし、楽しかった」「先生が増えるということで、生徒は質問しやすいし、いろいろなことを知るきっかけにもなるから、これからも毎週、選択授業に来て教えてほしい」「先生だけだと人が足りない。分からない人がいるときに、大学生がいると教えてくれる人がいていいと思った」という回答があった。無回答の生徒もいたが、約半数の生徒からこのような肯定的な回答があった。中学生にとって、大学生は身近な親しみやすい存在であると同時に、分からないことを教えてくれる先生でもあるという姿がみられる。問題点も含んではいるが、大学生による学習支援活動は、生徒の側からみれば、意義深いものであるといえる。

4 研究の成果と今後の課題

本研究は、大学生による学習支援活動を受けた中学生の意識を調査することによって、インターンシップについて、大学生のキャリア・ビジョンの明確化やキャリア・デザインを支援する役割に加えて、学校教育現場においていかなる役割を果たし得るのかについて検討することを目的として行った。

大学生による学習支援活動を受けた中学生に対して、大学生の授業参加について、大学生が授業中に果たした役割について、学習意欲について、大学生の学習支援の態度についての4つの観点から意識調査を実施したところ、①生徒の多くは、大学生の授業参加について好意的に受け止めており、インターンシップを今後も続けてほしいと考えていること、②文法と書くことに関して大学生に助けられたと感じている生徒は多いが、発音、会話、読むことに関しては大学生に助けられたと感じている生徒はそれほど多くないこと、③大学生による学習支援活動によって約4割の生徒の学習意欲が高まったこと、④大学生の学習支援の態度について、非常に多くの生徒が、積極的で、熱心で、親しみやすいと感じていることが明らかになった。本章では中学生の意識調査の結果から得られたこの4点について検討を行い、研究のまとめとする。

まず、①の生徒の多くが、大学生の授業参加に好意的に受け止めており、

インターンシップを今後も続けてほしいと考えていることについて検討する。学習支援活動を行っている大学生の意識調査では、「生徒の役に立っていると感じるか否か」を問う設問において、77%が「どちらともいえない」と答えている⁽⁷⁾。「そう思う」と答えたのは、わずかに23%だけであった⁽⁸⁾。

この結果は、中学生の多くが一人の先生の授業よりいい、質問がしやすくいいと感じていることと矛盾する。つまり、生徒たちは、大学生が授業に参加してくれることによって授業がよくなると感じているが、大学生自身は自分はそれほど役に立っていないと感じているのである。だが、大学生は「どちらともいえない」と答えているものの、質問されて答えられたとき役に立っていると感じる、あるいは、みんなが楽しそうに授業を受けてくれる時に役に立っていると感じるというように、自分が果たしている役割にある程度の効力感を持っている⁽⁹⁾。この原因は、結果の②に関連していると考えられるので、次に②の結果について検討する。

②は、文法と書くことに関して大学生に助けられたと感じている生徒は多いが、発音、会話、読むことに関しては大学生に助けられたと感じている生徒はそれほど多くないという結果である。この原因としては、選択英語の授業であることから、問題集の問題を解く形式が多くなったことによることを挙げた。

大学生の調査によれば、彼らは、インターンシップの活動を通して、「英語の分かりやすい教え方を学びたい」「発音、語彙力、リスニングがまだまだだと感じた。ますます英語の勉強に励みたい」というように、英語を教えるためには自らの英語力を伸ばす必要があると考えていることが明らかになった⁽¹⁰⁾。また、「生徒の心を見る目」「人をまとめる責任感と自信」「コミュニケーション能力」「英語力」「教育者としての知識」が自分たちに必要であると答えている。大学生は、インターンシップの活動を通して、自分が役に立っていると感じることもある一方で、このような指導力不足、英語の力量不足という問題を抱え、現実の学校教育場面に対応できる力量を十分に備えていないことに戸惑い、生徒たちの役に立っているのだという実感を持つことができない状況に置かれていると考えられる。

中学生も、大学生は身近で、質問しやすい存在であり、授業に参加して学習支援をしてくれる有り難い存在ではあるけれども、指導力という点では不十分であると感じていることも、大学生が授業中に果たした役割について助けになったという回答が少ない結果になった要因の一つであると考えられる。

次に、③大学生による学習支援活動によって約4割の生徒の学習意欲が高

まったことについて検討する。インターンシップを行った大学生の中には、大学で学んだことは学校教育場面には活かされない、つまり役に立たないと感じ、活動の意義を見失った学生もいたが⁽¹¹⁾、大学生が授業に参加することによって、生徒のうちの約4割は学習意欲が高まった。中学校の授業場面で、大学で学習したことを直接発揮することは困難であったのかもしれないが、生徒たちを支援して、学習意欲を向上させることは、教師の使命の一つであると考えれば、授業に参加することによって、間接的にはあるかもしれないが生徒たちを支援するという目的は果たされていたのではないだろうか。もちろん、インターンシップに参加した大学生の多くにとっては、中学校での経験は、指導力不足を実感する場面も含めて、大学で学んだことと学校教育現場での教師の仕事に関連するものとして捉えるよい機会となった。

最後に、④大学生の学習支援の態度について、非常に多くの生徒が積極的で、熱心で、親しみやすいと感じていることについて検討する。大学生は、インターンシップをしてよかったこととして「教育実習前に経験できてよかった。今までは、生徒として教師をみてきたが、今は教師の手本として教師を見ている」「生徒と接することで実際の中学生の様子が分かった。現場の状況が分かった」「生徒との接し方を具体的に学べたこと」などを挙げている。

つまり、インターンシップを通して、教師の視点を持つ、現実の学校教育場面を捉える、具体的な指導方法を学ぶといった、大学の教職課程における授業では体験することができない実践的な学びが行われた⁽¹²⁾。大学生は、真剣に生徒たちと向き合っており、その真剣さが授業への積極的な参加や生徒への熱心な指導として現れたのだと考えられる。加えて、中学校の教師たちよりも生徒たちと年齢が近いことから親しみを持って接することができたのであろう。これら全てが、質問しやすい環境、英語の学習意欲の向上へとつながったといえる。

以上の結果から、大学生によるインターンシップには、大学生のキャリア・ビジョンの明確化やキャリア・デザインを支援する役割に加えて、生徒たちが必要に応じて気軽に質問できる学習環境を整えることができる、大学生が積極的に授業に参加し、熱心に関わることによって中学生の学習意欲を高めるという役割があることが示唆された。今後は、中学生の意識調査、大学生の意識調査によって得られた結果をもとにして、さらに大学生、中学生双方にとってより効果的なインターンシップの在り方を検討することが研究課題である。

註

- (1) 柴沼晶子・松崎洋子・ジョイ・ウィリアムズ・金山愛子、2005、「『循環型英語教育』を目指して」、敬和学園大学紀要第14号、26頁。
- (2) 同論文、20-24頁。
- (3) 伊藤敦美、2006、「教職課程におけるキャリア支援－インターンシップと大学内ティーチングアシスタントを取り上げて－」、敬和学園大学紀要、第15号、109-128頁。
- (4) 本間昇、2002、「TAを定期的に活用した授業実践」、『教育実習の新たな形を探る－インターンシップを手がかりに－』、第2回教育実践交流ワークショップ記録集、7頁。
- (5) 中村義美が、2000年、2001年に実施した調査を参考にして作成した。中村義美、2001、「ティーム・ティーチングに対する中学生の意識（第1回目）」、「TAに対する中学生の意識の最終調査（第4回目）」『教職課程における英語の実践的指導力の養成』、教職課程における教育内容・方法開発の開発研究事業平成12年度・平成13年度文部科学省委嘱報告書、81-84頁及び94-99頁。
- (6) 本調査は、通常授業のクラスごとに調査用紙を中学校の授業時間に配布し、終了後回収する方法で実施した。通常授業のクラスには、選択科目として英語を選択していない生徒も含まれていたことから、分析対象とならない生徒が生じた。
- (7) 伊藤敦美、「教職課程におけるキャリア支援－インターンシップと大学内ティーチングアシスタントを取り上げて－」、114頁。
- (8) 同論文、114頁。
- (9) 同論文、113-115頁。
- (10) 同論文、116-117頁。
- (11) 同論文、126頁。
- (12) 同論文、118頁。

(平成18年度科学研究費補助金 課題番号17304656802)